東海新報　平成24年(2012年)12月21日(金曜日)

『五葉山』からの贈り物 ⑤1

『それぞれの生きるかたち』

～復興への道のり～

秋田県大館市　小林　佳久

「それぞれの生きるかたち～『五葉山の魅力』リレーエッセイ～」は、陸前高田市に大館市から毎週通い教育支援等を続けている高橋秀一さんから紹介されて、ぐっと引き込まれ一気に読んだ。様々な方によって描かれた〝その山〟が気になりボランティアバス（ボラバス）の車窓から探してみたものの、みつけられなかった。

しかし先日、「こころの情景　思い出写真館」（㈱東海新報社）の中に、津波に襲われる前の大船渡市街から望む五葉山を発見した。山に抱かれている街の情景に、エッセイの言葉が輝きを増して甦った。

山と言えば、以前エベレストを目指したことがある。ただし夏の富士山でも8合目を超えたことのない私に登頂できるわけもなく、飛行機の窓から山を眺めるという方法を選択した。

ところが、搭乗口の傍らでいつまで待ってもゲートが開かない。定刻はとうに過ぎているのに何の案内もなく、地上係員の姿すら見当たらない。時計を見てはイライラし意味もなくうろうろと歩き回った。他にも数人が落ち着きなく動き回っていたのだが、よく見るとみな日本人であった。

そこにいた他国の人たちは、穏やかに本を読んだり談笑したりして過ごしていた。彼らは雄大な自然の中でゆったりと流れる時間を至極当然に受け入れているように見えた。結局、正統派日本人を自任する私は次の予定が気になり、搭乗をあきらめ空港を後にした。

ヒマラヤ登山を支援するシェルパは、神々の座とよばれる山で生きている。彼らに限らず地元の山に抱かれて住まう人たちは皆、その山の恵みを受け、その山と共に暮らしている。安易に飛行機の窓から山を眺めようとしたり写真だけで山を知った気になったりする私ごときのかかわり方とは全く違うのである。

五葉山に抱かれて気仙地域に暮らす皆さんの多くは、「あの日」以来二つの山を抱えている。失われてしまった「形の再建・復興」という山と、傷ついてしまった「心の修復・回復」という山。そのどちらの山も、一人一人が暮しの中で乗り越えていかなければならない厳しい現実の中にある。

願わくは一日でも早く復興回復してほしい。けれども、時間に追われるばかりが大切なのではない。人それぞれに生きるかたちが違うのだから、それぞれに流れる時間の速さも違うはずだ。とてつもなく恐ろしい顔を見せたがやさしく全てを包み込む大自然の中に生かされていることを思えば、立ち止まったり思う存分泣いたり時には後戻りすることさえも厭わない、そんな焦らぬ生き方もあるだろう。

時々募金活動を行っている。たくさんの大館市民が発災直後と変わらぬ優しさで応じてくれる。みんな今でも被災地を思い何かをしたいと願い続けているのだ。ボラバスツアーにも毎回多くの老若男女が参加して、御霊が眠り皆さんの思い出が詰まった町を少しでもきれいにしたいと活動している。

同じ山に抱かれて絆を結んだ人同士が、励まし助け合いながら共に抱えた山を乗り越えていく。「それぞれの生きるかたち」から、私たちは学び続けたい。長く険しい道のりを、ずっと応援し続けたい。輝く街並みが望める五葉山に登る日を夢見て。

【執筆者プロフィール】秋田県大館市在住、47歳。大館ボラバスプロジェクト責任者。大館市少林寺拳法協会理事長。隣県だからこそできる支援を模索しつつ、誰でも気軽に参加できる日帰りのボラバスツアー等を企画している。

陸前高田市で少林寺拳法のグループと共に活動するボラバス参加者たち